

# きょうと福祉倶楽部だより 2021年 8号

## 暑い8月が今年もやってきました 原爆小頭症、41歳で亡くなったSさんのおもいで

今年も日本に2発の原子爆弾が落とされた8月がやってきました。

毎年

あの日から76年が経過した今もあのおぞましい兵器は地球上に存在しています。

そして唯一の被爆国であるわが国政府は核兵器の廃絶を願う被害者、国民の声は届かないのか核兵器禁止条約には参加を拒んでいます。

8月6日、9日に一瞬のうちに生命を奪われた人の無念、生き延びたものの身体の障害や疾患によって惨い人生を生き抜いた人たちが沢山いる事をわたしたちは忘れてはなりません。

きょうと福祉倶楽部の有田が医療機関在職の時、出会ったSさんについてお伝えしたいと思います。彼は41歳で人生を終えてしまいました。

彼が被爆したのは広島市。お母さんのお腹のなかでの被爆です（胎齢3ヶ月）。まだこの世に生を受ける前になんの罪もないSさんに「悪魔」は襲いました。

お父さんは炎と爆風からは生き延びました。しかし急性症状に苦しみ、あっというまに亡くなってしまいました。生き延びたお母さんは夫の実家の四国でSさんを出産しました。お母さんはSさんをそこに残し、広島で暮らしたようです。残されたSさんの四国での暮らしは分かりませんが、その後東京都内でキャバレーの呼び込みや土木作業員として暮らしていました。そのSさんの右腕の付け根付近にはいつの頃からか痛い「できもの」が切っても、切っても出てくるようになったのです。彼は痛くなると病院を訪れ入院。整形外科医に切ってもらって痛くなくなるといなくなってしまう。お腹の中で被爆をした彼にはもうひとつの障がいがありました。

それは「原爆小頭症」です。近距離で胎児被爆をした彼は脳の発達に障がいがありました。だから学校での勉強もできません。知能の低さは仕事の選択肢も狭めました。

そんな彼が有田の元に訪れたのは1988年。右腕にこぶし大の「できもの」があり、病衣を持ち上げていました。この時、被爆者手帳も住む家もお金もありませんでした。全部失っていたのです。その無くなったものを回復させるために有田は支援をしました。

この入院で彼は右腕を切断しました。彼がその時に放った言葉は「これでせいせいした」でした。大切な身体の一部を失った彼にこんな言葉を語らせた「できもの」はよほどつらいものだったのでしょうか。

わたしは右腕を落とした彼が落ち着いて暮らせるように精一杯のお手伝いをさせて頂きました。家を確保し、生活保護で暮らしを支える生活費を確保し、「できもの」が原爆に起因することを認めさせる厚生省への申請などを行い、彼は生活の再建に取り組みました。しかし落ち着いた生活を取り戻したのもつかの間でした。今度は頭部に「できもの」が出てきたのです。そして再入院。そのまま帰らぬ人になりました。

お亡くなりになる前に有田に彼はこう言いました。「原爆はゴメンだ」と。戦争は障がい者を生み出します。戦争は罪亡き人々の暮らしと心を壊します。介護、福祉に携わるわたしたちはそのことを忘れてはなりません。人々の幸福を作り出す介護と福祉は戦争と両立しないのです。

Sさんの人生をもっと知りたい方はこちらをごらんください。

<http://fukushi-club.com/wp-content/uploads/2015/05/dc5ef3c48dec0ec0ca3c50a141920805.pdf>